

序 言

本書は、北海道教育大学函館校において2018年から継続して開催してきた国際地域研究公開シンポジウムの議論をもとに編まれたものです。本シンポジウムは、地域に根差す大学として、グローバルな視点からローカルな課題を見つめ直し、市民の皆様とともに考える場をつくることを目的として続けてきました。

本書のテーマは、「国際地域研究とDEI—グローバルとローカルをつなぐ場を問い直す—」です。DEIは、多様性（Diversity）、公正性（Equity）、包摂性（Inclusion）を意味する言葉であり、近年、教育や職場、地域社会など、さまざまな場面で用いられています。DEIを考える際には、単なる理念として理解するだけでなく、私たちが暮らす地域と、世界の動きとの関係に目を向けることが重要です。

実際に、DEIに関わる多くの社会運動は、ある地域での出来事や活動をきっかけとして始まり、それが各地のローカルな実践へと広がり、やがて国境を越えた連帯へとつながってきました。このようなローカルとグローバルの相互作用によって、私たちは、日常の中では見えにくい差別や偏見が、社会的・経済的な構造として地域の中に組み込まれていることに気づかされます。そして、その気づきが、社会をよりよい方向へ変えていく力になるのではないのでしょうか。

現在、国内外ではDEIに対して否定的な意見や反発も見られます。そのような状況だからこそ、分かりやすい答えや単純な言葉に安易に飛びつくことなく、さまざまな立場や視点を踏まえながら、「誰にとっても生きやすい社会とは何か」を粘り強く考え続けることが求められています。本書は、そうした問いに正面から向き合おうとする試みです。

本書では、教育、言語、政治、地域社会、文化、環境など、さまざまな分野においてDEIをめぐる現代的な課題に向き合いながら、グローバルな動向

とローカルな実践との関係を問い直しています。

収録されている各論考は、分野や方法の違いを超えて、「多様性をどのように受け止め、公平で包摂的な社会をいかにして築いていくのか」という共通の問いによってゆるやかにつながっています。DEIを単なる理念や流行語としてではなく、地域の現実や日常の実践と結びついた課題として捉え直そうとする点に、本書の特徴があります。

本書を通して、読者の皆様が、グローバルとローカルのあいだを行き来しながら、社会や地域の在り方を多角的に考える一助となれば幸いです。最後に、本書の執筆・編集に携わった全ての方々、そして本書を手にとってくださった皆様に心より感謝申し上げます。

2026年4月

北海道教育大学長 田口 哲

国際地域研究 VIII

目 次

序 言	田口 哲…i
-----------	--------

第1部 シンポジウム—国際地域研究と DEI—

1. 概 要	3
北海道教育大学函館校ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン (DEI) 推進宣言	
2. 講演録 包摂・自治・安全の場としての都市コミュニティ —集約されえない多様性をどう「場」にあつめるか?—	富永 京子…6
「生活空間」と密接に関わる社会運動／高山建築学校の事例から／札幌市にあるシェルターの事例から／空き家を活用した兵庫県川西市の事例から／ミクロなレベルの社会運動	
3. パネルディスカッション「国際地域研究と DEI—グローバルとローカルをつなぐ場を問い直す—」.....	富永 京子／水谷 仁／金 鉉善／平井 健文 21

コラム 1 パネルディスカッションの解題に代えて	平井 健文…36
--------------------------------	----------

第2部 教育現場における DEI の実践と課題

第1章 実在の人物から学ぶ

—私たちはどのように「グローバル人材」像に迫ったか—	津曲 真樹／上山 旺奨…41
-------------------------------------	----------------

はじめに 41

1. 「グローバル人材」深掘りの出発点 42
2. 「グローバル人材」を研究テーマにするための準備 43
3. 「グローバル人材」像への接近 44
4. 研究成果の「グローバル人材」授業への還元 46
5. 和製ではない「グローバル人材」像の提示 48

おわりに 50

第2章 地域における多言語・複言語活動の可能性

—外国語教育との連携による多文化共生意識の涵養を目指して—

……………石森 広美／菅 奏／高橋 日花里／沼田 七星／永井 里佳…52

1. 課題意識と本章の目的 52
2. 多言語・複言語活動の開発 54
3. 活動概要 56
4. 調 査 61
5. まとめと展望 65

第3章 日本語教師とDEI

—「日本語教育の参照枠」と「やさしい日本語」の視点から—

……………伊藤(横山) 美紀…70

はじめに 70

1. 日本語教師の活動分野と使用言語 70
2. 「日本語教育の参照枠」とDEI 74
3. 言語政策としての「やさしい日本語」とDEI 77
4. 日本語教育が目指すDEI 80

おわりに 81

コラム2 プレインジャパニーズの難しさ …………… 高橋 圭介…84

第4章 外国人散在地域における日本語学習支援者の養成と成果

—函館校・国際地域イノベーター人材養成プログラムの実践から—

……………佐藤 香織…87

はじめに 87

1. 外国人散在地域における日本語学習支援の意義 87
2. 各論科目と実習科目の学びと成果 90
3. 日本語学習支援専攻における成果と課題 96
4. 今後の展望 98

おわりに 100

コラム3 異質な他者として 有井 晴香…102

第5章 スクールワイドPBSで築く包摂的学校文化

—DEI との理論的親和性と今後の展望— 杉本 任士…104

はじめに：なぜ今、DEI とスクールワイドPBS なのか 104

1. スクールワイドPBS とは何か：行動科学と人権思想の融合 105

2. DEI とスクールワイドPBS の構造的な対応：理念を実践に翻訳する 108

3. 日本の学校への導入：文化的な適合と実装戦略 111

4. 政策的展望と研究課題 115

おわりに 117

コラム4 ま〜るくなあれ 長尾 智絵…120

第3部 DEIの視点から社会を見つめる

第6章 DEIとアメリカ

—議論の推移とその歴史的位相— 石本 凌也…125

はじめに 125

1. DEI の起源とその展開 126

2. アファーマティブ・アクションをめぐる論争 129

3. DEI 概念の登場 132

4. 反対派の逆襲 135

おわりに 138

コラム5 開かれた追悼のためのアーカイブ 山川 卓…142

第7章 現代ドイツにおける自由民主主義のジレンマ

—2025 年ドイツ連邦議会選挙における多様性と包摂性のアポリアー— 水谷 仁...	145
はじめに	145
1. ドイツにおける自由民主主義の黎明期としてのヴァイマル共和国	147
2. 現代ドイツにおける多様性と包摂性のアポリア	149
3. 2025 年ドイツ連邦議会選挙における多様性と包摂性のアポリア	153
おわりに	157

コラム 6 DEI の指標を考える? 藤井 麻由...163

第8章 文化遺産を社会的に「開く」ために

—社会的包摂の議論を手がかりに— 平井 健文...	165
1. 文化遺産と DEI—対極の概念?—	165
2. 社会的な存在としての文化遺産—CHS の理論—	166
3. 社会的排除／包摂と文化遺産	168
4. 産業の語りから地域と生活の語りへ—日本遺産という「制度」の活用— 171	
5. 教育をととした文化遺産の価値の見直し—多様な語りを学ぶ実践—	174
6. 文化遺産を社会的に開くために	177

第9章 OECM と自然共生サイト—生物多様性保全の新たな展開—

..... 村上 健太郎...	181
はじめに	181
1. 生物多様性とその危機への対応	182
2. OECM と自然共生サイト	187
3. それでも自然共生サイトが重要と考えられる理由	193
おわりに	195

コラム 7 共生社会 2.0 ? - 人工的他者である AI との距離感

..... 大久保 好章...199

あとがき 202

執筆者紹介 203

第 1 部

シンポジウム ― 国際地域研究と DEI ―

1. 概 要

シンポジウム「国際地域研究と DEI—グローバルとローカルをつなぐ場を問い直す」が、2025 年 10 月 31 日（金）にホテルテトラ（函館市梁川町）の 1 階ホールにて開催された。このシンポジウムは 2018 年から毎年開催され、2025 年で 8 回目を迎えた。

冒頭、田口哲北海道教育大学長による挨拶の後、函館校キャンパス長より、本シンポジウムが 2018 年から継続して開催され、国際地域研究の意義を多角的に検討してきた場であることが述べられた。その上で、国際地域学科が有する多様な専門分野や研究資源そのものが、持続可能な社会と教育を支える基盤であることが強調された。また、排他性や分断が深刻化する現代社会において、誰もが公平・公正に尊重され、共に学び、成長できる環境を大学が主体的に整えていく必要性が示され、函館校が 2025 年 10 月 7 日に「ダイバーシティ、エクイティ、インクルージョン（DEI）推進宣言」（次頁参照）を表明した背景とその意義が語られた。さらに本シンポジウムが、その理念を具体的に考え、国際地域研究と DEI の関係を問い直す重要な契機となることへの期待が述べられた。

第 1 部では、立命館大学の富永京子氏による基調講演「包摂・自治・安全の場としての都市コミュニティ—集約されえない多様性をどう『場』に集めるか？—」が行われた。続く第 2 部のパネルディスカッションには、本委員会の平井健文講師がモデレーターとして、また函館校の金鉉善准教授、水谷仁准教授がパネリストとして登壇し、それぞれの研究者としての立場から富永氏に問いを投げかけながら議論が展開された。なお、基調講演およびパネルディスカッションの講演録・記録は、第 1 部の以下に採録している。

北海道教育大学函館校ダイバーシティ・エクイティ& インクルージョン (DEI) 推進宣言

令和7年10月7日

北海道教育大学函館校

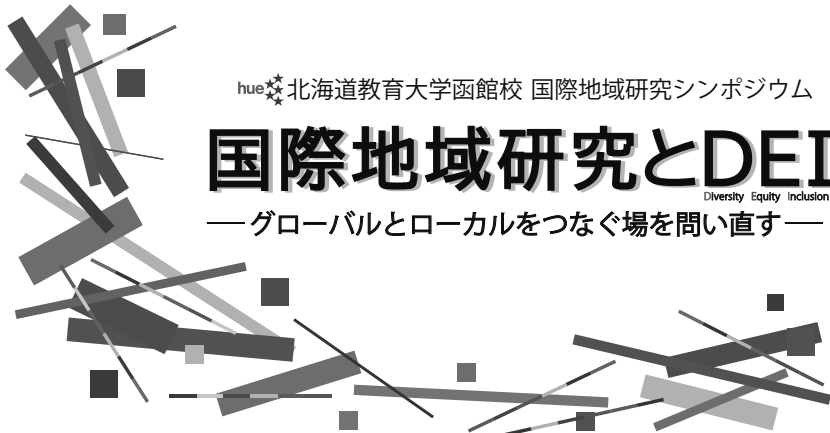
北海道教育大学函館校は、「国際的な視野と教育マインドをもち、豊かなコミュニケーション能力を発揮しながら、地域を活性化できる人材の養成」を目指し、人々の日々の営みとしての教育の発展に資する教育研究を充実させ、道南地域をはじめとした国内外の地域社会および地域の教育に貢献してきました。

グローバル化が進む現代社会において、持続可能な共生社会の発展を構想し、実現していく人材を育成する場では、すべての構成員が互いの違いを尊重し合い、それぞれの能力を最大限に発揮できるように教育研究環境を整えることがきわめて重要です。

北海道教育大学函館校は、「人間と地域の成長・発展を促す大学」として、すべての構成員の多様性 (Diversity) を尊重し、学内のあらゆる場面において、人種、国籍、民族、言語、性別、性自認、性的指向、障がい、疾病、年齢、宗教、信条、出身、出自、地位、家族構成などの個人の属性や背景によって差別されることがないよう公正性 (Equity) の確保に努め、さまざまな属性や背景をもつすべての構成員を包摂 (Inclusion) する学内コミュニティの実現に向けてDEIをより一層積極的に推進していくことを、ここに宣言します。

(基本方針)

1. DEIに関する意識の啓発を推進します。
2. DEIの理念に基づき、学修・研究・労働環境の改善に取り組みます。
3. 地域社会との連携・協働を深め、DEIの理念のさらなる普及に努めます。
4. DEIの視点に立ち、地域社会および教育の発展に貢献する国際的な視野をもった人材を育成します。
5. 構成員は、互いに尊重、配慮し、協働して共に成長していくことを目指します。



hue★北海道教育大学函館校 国際地域研究シンポジウム

国際地域研究とDEI

Diversity Equity Inclusion

— グローバルとローカルをつなぐ場を問い直す —

2025

10/31 fri

時間 14:50 ~ 17:40
(開場 14:30)

会場 北海道教育大学函館校 第14講義室

参加 無料

申込 不要

基調講演

包摂・自治・安全の場としての都市コミュニティ
：集約されえない多様性をどう「場」にあつめるか？

講師 立命館大学 産業社会学部 准教授 富永 京子氏

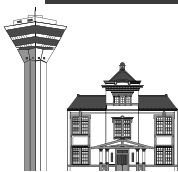


講師プロフィール

札幌市出身。東京大学大学院人文社会系研究科修士・博士課程修了。日本学術振興会特別研究員を経て2015年より現職。博士(社会学)。若者の社会参加や市民運動を中心に研究。主な著書に『社会運動と若者—日常と出来事を往還する政治』(ナカニシヤ出版、2017年)『みんなの「わがまま」入門』(左右社、2019年)『なぜ社会は変わるのか はじめての社会運動論』(講談社、2025年)など。2017年4月よりシノダス国際社会動向研究所理事、日本社会学会理事を兼任。

プログラム

- 14:50 開会の挨拶 田口 哲 (北海道教育大学長)
15:00 基調講演 「包摂・自治・安全の場としての都市コミュニティ：集約されえない多様性をどう「場」にあつめるか？」
講師 富永 京子氏 (立命館大学産業社会学部准教授)
- 16:10 休憩
16:20 パネルディスカッション 「国際地域研究とDEI—グローバルとローカルをつなぐ場を問い直す—」
パネリスト 富永 京子氏 (立命館大学産業社会学部准教授)
金 健輔 (北海道教育大学函館校准教授)
水谷 仁 (北海道教育大学函館校准教授)
モデレーター 平井 健文 (北海道教育大学函館校講師)
- 17:30 閉会の挨拶 長尾 智絵 (北海道教育大学函館校国際地域研究推進委員長)



北海道函館市八幡町1番2号

アクセス

- ・面館/バス「函館駅前」から47系統「教育大通」下車徒歩約5分
82系統「宮前町」下車徒歩約10分
- ・函館市電「五稜郭公園駅前」下車徒歩15分
- ・JR「函館駅」から車で9分

お問い合わせ先

国立大学法人
hue★ 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

函館校室術情報グループ

Tel 0138-44-4230
Fax 0138-44-4381
Mail hak-tosh@j.hokkyodai.ac.jp



北海道教育大学 函館校公式HP/SNS

「シンポジウム ポスター」

2. 講演録

包摂・自治・安全の場としての都市コミュニティ

—集約されえない多様性をどう「場」にあつめるか?—

富永 京子

ただいまご紹介に与かりました富永京子と申します。今回は、こうした大変光栄な場でお話することができ、大変嬉しくまた緊張しております。どうぞよろしくお願いいたします。まず、自己紹介をさせていただきます。大学まで北海道札幌市で過ごしました。こうした言い方が適切かはわかりませんが、1980年代生まれで、社会運動というものが不可視化されて久しい世代であるかと思います。

社会運動の研究者は、たとえばNPOで活動していたり、市民活動に携わってこられたりしてきた方が非常に多いのですが、私の場合はそうしたもののにも触れ合わないままでした。そんな中、学部4年生のときに、北海道洞爺湖サミットが行われました。札幌市でも、関連するイベントや閣僚会合などがあったのですが、同時に、サミットに反対する人が1万人くらい国内外から集まってきました。とても驚きました。私は政治的な関心がない方ですから、1万人が反対してG8は止められるのか、政策に介入するのはとても難しいのでは、と思ってしまうわけです。ただ、それでも1万人がサミットの会場に集まってくるという事実はとても衝撃的でした。

G8サミット、今はG7ですが、これはいわゆる先進7カ国の中で毎年国を変えて行われています。実は、ドイツで行われるときはドイツで、イギリスで行われるときはイギリスで、やはり1万人、10万人と人々が集まって抗議行動をしています。その後、2015年から2016年にかけては、日本国内でも安保

法制抗議行動と言われるものが起こります。SEALDsと呼ばれるネットワークが有名ですが、非常に大規模な社会運動、デモや集会などが行われました。ただ、こうしたいわゆる社会運動的なもの以外にも、興味深い現象があります。たとえば、多様な人が国境や県境を越えて、さまざまな交通機関で集まって、3日間なり10日間なり、サミットの会場や官邸前の周りで、泊まりがけで抗議を行うのです。このふたつの抗議行動だけではなく、辺野古での基地建設反対運動や、原子力発電所の再稼働反対運動などでも、やはり泊まりがけの抗議行動が行われています。そうすると、そこに「生活」ができるわけです。ここに非常に興味を持ったのが、社会運動の研究を始めた一つのきっかけです。

社会運動の研究をしているという、デモや、環境運動、フェミニズムの研究でしようと言われるのですが、私としてはむしろ、生活の、本当に細かいところに社会運動があると思っています。たとえば、椅子の高さを5センチ変えれば、子どもや身体に障害のある人でも座れるようになる。あるいは、テーブルを可動式にすれば、誰だって簡単に運べるようになるから、誰でも今日のような会場の設営ができるようになるなど。こうしたところにインクルージョンやダイバーシティのようなものがあるのではないかと考えています。こうした関心から、現在はオルタナティブ・スペースの研究をしています。日本では居場所事業と言われることも多いと思うのですが、生活困窮者の方々のためのシェルターや子ども食堂などの場所の空間形成に関する研究です。つまり、いろいろな人が安心してある場に集まれるようにするにはどうすればよいのかを、地理学や建築学を専門とされる方々と一緒に研究しているということです。本日、そうしたことを中心にお話しさせていただきます。

「生活空間」と密接に関わる社会運動

まず、プロテストキャンプについて説明します。先ほど申し上げたように、G7やG20などの閣僚会議、あるいは原子力発電所などへの反対運動が起こると、その近隣にキャンプができます。抗議者がたくさん集まるので、その人たちが長時間滞在して、抗議行動を常にできるような設備や場が、自然発生的に生まれてきます。これがプロテストキャンプです。そこでは、単純に抗議者が

待機したり話し合ったりするだけではなく、長時間にわたって滞在することになるので、ある程度の生活のようなものが生まれます。たとえば、日除けや夜を明かすためのテント村やトイレなどです。これを気の利く人が設置したり、オーダーしたりするようになったり、あるいはコミュニティキッチンができるようになったりするのはです。他にも、緊縮財政に対する反対運動である「Occupy Wall Street」や、香港の「逃亡犯条例」への抗議デモなどは、都市を占拠して抗議行動をするものがあります。数時間から数十時間、数日にわたるものまでさまざまですが、やはり泊まりがけである以上、テントやキャンプが市街地にできるわけです。これ自体はかなり歴史が古く、たとえば1960年代の学生運動や、イギリスの「グリーナムコモン・ピースキャンプ」などでも見られた現象です。実は最近の日本でも見られます。2023年、イスラエルのパレスチナ侵攻に対する抗議行動として、首都圏のいくつかの大学にテントが出現して、そこに学生や学外の方が滞在してキャンプをしました。このように、泊まりがけでパレスチナやイスラエルの問題について考えることを、「生活を通して」行っていたのです。

もちろん、こうしたキャンプの政策的な実効性は薄いと思います。たとえば、G7抗議行動のプロテストキャンプに関しても、それがG7の政策を変えるわけではなく、パレスチナ連帯のキャンプがすぐに戦争を止められるわけでもない。デモなどのような、外部の人への意識啓発の効用も比較的薄いです。しかし、その中で、生活を通じて政治問題を考えていくという部分が、非常に私が惹かれたところなのかと思います。パレスチナ連帯のキャンプの中で、パレスチナでいま何が起きていて、何が問題なのだろうと話し合ってみたり、どう読書会をしようかと考えてみたり。あるいは、そこで振る舞われる料理にしても、イスラエル産のレモンを使わないとか、パレスチナの郷土料理を作ってみようという話になるかもしれません。こうした同じ問題意識を持っている人とつながることができ、これは日本独特かもしれないですが、外の社会だと「意識高い」「思想強い」と言われそうな話をできるのが良いところではないかということです。それによって、たとえば大学に提言してみようなど、別のアクションにつながっていくことがあるのかなと思います。

私は、いわゆるデモやシンポジウムだけが社会運動だと考えていたら、おそらく早めに研究をやめていたと思います。でも、こうした方々は、生活そのものを社会問題化、社会運動化するわけです。たとえば、私が調査でお世話になった方への年賀状に「令和」と書くと、とても怒られます。天皇制を肯定するのかと。これは非常に興味深くて、たとえばSNSに政治的なメッセージを書くことや、デモの現場に行くことではない政治を、政治的なこと、社会的なことを個人化する面白さみたいなものをここに見ているのかなと思います。

プロテストキャンプはこれまでご紹介した事例だけではなく、たとえば移民支援のキャンプや、気候変動に対して意識のある人々が環境配慮的な生活を行うキャンプなども、ヨーロッパではよく見られます。そこでとくに興味深く感じたのが、「空間をめぐる政治」というものです。先ほど申し上げたような、椅子の高さを5センチ変えろとか、部屋の仕切りをずらすとか、こうしたことを彼らは頻繁に行います。こうした空間形成が政治につながっているというアイデアが興味深く、現在、研究を進めているところです。

これは私たちの生活を考えたときにも得るところがあるかと思います。こうした人たちは建築空間の形成に関わりますから、DIY アクティビストやセルフビルド・アクティビストという名乗り方をします。プロテストキャンプでは、生活を一からみんなで立ち上げなければいけません。日本では被災地の生活などが部分的に当てはまるかもしれません。必要性に迫られた空間形成である一方で、いわゆる消費者としてしか生活をしてこなかった人たちが、自分で空間を作ることによって、自分の周りの世界を自治できる、オーガナイズできるようになります。こうした社会的な有効感を得られるものとして研究されることもあります。たとえば、ドイツのプロテストキャンプです。木の端材やビニールシートを使って、自分たちで仮設のツリーハウスのようなものを作ったりしますが、こうしたことが一つの運動になっています。この事例の面白さは、非常に即興的なところです。寒冷地や、逆に雨季が長いようなところでプロテストキャンプを行うことがあります。そういった気候が安定しないようなところだとインフラが不安定になるので、電線から電気を拝借したり、雨が降ったら近くのお店にあるカバーを拝借してテントに付けたりします。さら

に、プロテストキャンプは、もちろん政治の側からすると歓迎すべきことではありませんから、警察から弾圧されることも当然あります。ここでまた面白いのが、私たちは壊れにくい建築がよい建築だと思いがちですが、むしろ壊れやすく、作りやすくすることが大事だということです。

そして、みんなが関われるということも大事です。専門の職人さんが多い状況もありえますが、むしろ、子どもでも、力のない人でも扱いやすい素材を選定した方が、みんなが空間形成に携われるから良いというところにも、私はすごく衝撃を受けました。基本的に、私たちは消費者として、丈夫なものが良いもので、専門的な人が作った空間が良いものだと思いがちです。しかし、そうではない空間のあり方、つまりみんなが手入れしたり、修理できたりする方が、みんなが空間に民主的に関われるという考えを与えてくれる研究対象だと思います。

ただ、これは海外の事例であって、日本にはこのようなラディカルな人たちはいるのかというのも疑問でした。私自身も研究と生活をつなげたいと考えていますので、いくら海外でそういった事例を見ても、それを生活や教育のレベルで実践できないと、机上の空論のような研究になってしまうと考えていました。そこで、生活のレベルに置き直せるような事例を探していたときに、高山建築学校という非常に興味深い事例に出会いました。もう50年、60年と続いている取り組みで、これは一つのプロテストキャンプだと思い、参加させていただきました。

高山建築学校の事例から

高山建築学校には、学生、専門家、工務店を経営する方など、主に建築系の方々が集い、古民家で10日間の共同生活をしながら、その敷地内で何か作るというものです。彼らは、「ものづくりの学校」という言い方をします。現在の建築では、専門化、高級化、さらに頑文化といってしまうか、大規模で丈夫なものを作ろうとする。今の世の中で、自分の手で分業もせずに家を作ろうとする人はほとんどいないでしょう。多くの人は、お金をかけて専門業者に外注の方が絶対に良いと思っています。ただ、本来の「もの」はそうしたもの

ではなく、自分で作ることによって、その大変さが分かったり、どこが分業されているのが分かったりするものです。高山建築学校は、一から全部自分で作る、ものづくりのサマースクールと言われてきました。これは、分業や、大規模資本主義、消費社会に対する建築的なカウンターカルチャーのキャンプだと解釈して、現在、研究を進めています。

これを聞いた方は、「やっぱり意識高い系じゃないか」と思われるかもしれませんが、この試みは個人的なことが政治的なことになる過程を示すもののので、少し詳しく説明させていただきます。その会場は、ほとんど窓もなく、フレームしかないような建物で、サマースクールが始まるたびにまず掃除から始まります。ここは豪雪地帯ですし、鳥の死骸などもたくさん家の中に入り込んでいます。わずかな窓も破けていることがありますので、掃除から始め、生活できる空間を作り出します。その後、各自で布団や寝袋を入れて共同生活をしていくという流れになります。そして、みんなが裏の敷地などを使って、椅子など自分で作れるものを作っていきます。

2020年代に皆さんが社会運動としてイメージするのはSNSだと思います。SNSは、大きな社会運動の媒体になりました。ただ、私にはそれも少し違和感があります。たとえば、この人はこういう問題を起こしているから、その人が出演するCMを流す企業に対して反対しましょうというハッシュタグが付き、それがSNSで拡散されるというのは、社会運動として非常に実効性が高いと思います。実際に、それで変わった意識や社会も多くあります。学生さんと話していても、やはりジェンダーやダイバーシティに対する意識は私の何倍も高いと思いますが、それもSNSを通じた運動の成果でしょう。そういう意味で、SNSを通じた社会運動は確かに社会を変えたと思います。一方で、私が少し難しいと思っているのが「言葉」です。社会は、言葉のように明確な白黒をつけるデバイスではなくても変えられるのではないかと思いますし、現状では、弁の立つ人がもっとも社会を変えられるという状況になってしまうと思ったわけです。ですから、言葉でないものによる自治がこうした空間にあるのかなと考えています。高山建築学校に参加する人たちは、活動家というより建築に携わる人たちであり、口数が多い人ばかりではないですし、お子さんも

いますから、言葉を説得力あるように操るタイプの人たちではないんですね。ただ、だからこそできる政治・自治があります。たとえば、普通のプロテストキャンプでは、ミーティングをして合意形成を取って物事を決める傾向があります。しかし、そうしたルールを作るのではなく、何かを作ったり、動かしたり、隠したりするという、物理的な対処によって解決することがとても上手なのです。そこに、これからの社会運動のヒントがあるように思えます。

いくつか興味深かった事例をお話しします。ここで、大人と子どもを合わせて30人程度が、一つの古民家の中で、合宿のような形で10日間のサマースクールを行います。ここで、夜中に参加者が酔って話し声がうるさくなるといったトラブルがあるとする。私がこれまで研究してきたアクティビストのプロテストキャンプでは、まずルールを作る。夜12時以降はしゃべらないようにする、筆談にするなど、そうした話になってくると思うんです。しかし、この参加者は空間形成が得意な人たちなので、「では、離れにおしゃべり小屋を作ろう」「キッチンのを動かして会話スペースを作ろう」、などのアイデアが出てきます。次に、実際に経験した事例をご紹介します。女性と子どもの部屋がリビングの隣にあり（この分け方がどうかという問題もありますが）、そこに（建て付けの悪い）かなりうるさい引き戸がありました。ですから、出入りをすると、そこで寝ている子どもが起きてしまうんです。そこでどうしたかという、夜中はこの部屋に出入りしないようにしてくださいというルールを作るのではなく、ドアを外して布で仕切りを作る形で対処しました。おそらく、この布が薄く、着替えが見えないか心配だという話になると、その布を二重にするわけです。これはユニバーサルデザインの試行錯誤に近いと思います。言葉でルールを決めるのではなく、その場の試行錯誤を通して、多様な参加者、つまり子ども、女性、高齢の方、あるいは逸脱した振る舞いをする人もすべて含め、安全や包摂を両立した自治を、言葉以外の方法で達成しようとしています。これは非常に興味深い試みであり、また自分たちの生活の中でもできるかなとも思いました。

次の事例は、高齢で足が悪くなられた方が作ったトイレです。ここは非常に古い民家なので、トイレが和式で、大きな段差があります。しかも、この方

は頻繁にトイレに行かなければいけないのですが、トイレはかなり行きづらい位置にあります。そこで、椅子に洗面器を付けた簡易的なトイレを作られました。これによって何が生まれたか。普段、トイレの話は言いづらいわけですが、これを作ることによって、実はみんなそれなりにトイレに問題を抱えていたことがわかりました。たとえば、排泄に困難を抱えていることや、胃腸に疾患を抱えていることを言いやすくなったという話があります。これは、ものが切り開いた自治だと思うわけです。つまり、言葉のレベルでは、言いづらいことはいつまでも言えない。しかし、ここでの生活に困難を抱えている人がものを出すことによって、「それを言っているんだ」「対処しているんだ」とみんなが考えられるようになるということです。

続いて、私が「ポータブルキッチン」と論文の中で呼んでいるものをご紹介します。ここは古い日本家屋で、水回りがすべて家の端の方にあり、しかも台所があまり広くありません。当時で言う主婦が一人で調理作業をするようなキッチンで、集団的な調理には適さないうえに、役割を特定の人に押し付けてしまうようなタイプのキッチンです。それではいけないということで、参加者が考えたのが、キッチンの機能をポータブル化することです。それは、台の上にまな板を置くような単純なものです。ただそれによって、みんながそれぞれの場所で調理できるようになります。また、古い日本家屋なのでキッチン台もかなり高い位置にあるのですが、これでは子どもが調理に参加できません。しかし、ポータブル化によって、それまで調理に参加できなかった人たちも参加できるようになりました。

これらは、それほど難しいことではありません。簡易トイレはスツールの天板をくり抜いて洗面器を付けただけでも言えるし、ポータブルキッチンも台にまな板を付けただけです。ただ、こうした空間上の工夫によって、言いづらい問題が言えるようになったり、家事に関わりづらい人が関わるようになったりしました。これが私には興味深いところでした。これまで、社会運動的なプロテストキャンプを見ていると、こうしたことをルールで解決しようとするんです。調理当番は女性だけに任せないでね、トイレについてはこうしてね、と貼り出すようなイメージです。言葉で解決しようとするとかえってハレー

ションを生むさまざまな課題を見てきた身にとって、こうした事例は一つのブレイクスルーになりました。

ただ、この高山の事例も少し特殊なものとして感じられるかもしれません。では、いわゆるローカルな場所、より市民に関わりの深い場所の事例を考えると、おそらく現代の日本社会では子ども食堂や生活困窮者向けのシェルターなどの事業が出てくるのではないかと思います。いずれも、日本全国でその数は増えていると言われていますし、おそらく、寄付するというレベルでも関わられたことのある方が、これまでの事例よりもいらっしゃるのではないのでしょうか。欧州や南米などに多いのですが、スクワットという空き家を活用した取り組みとして、社会運動の文脈で数多くの蓄積があります。私はこうした枠組みを使いながら、先に紹介した事例の知見を、ローカルな居場所の問題として捉えています。ローカルな居場所においても、そこにはさまざまな人がいます。ここまで、多様な国籍の人、高齢者の方、子ども、さらに女性、つまりジェンダーのお話をしてきましたが、こうした多様な人々に対して、ローカルな居場所の空間形成を通じて、どのような包摂や自治を私たちがつくりうるかを研究しています。

札幌市にあるシェルターの事例から

現在、調査をさせていただいているのが、北海道札幌市にあるシェルターです。ここはシェルターの中でも特殊な取り組みをしています。まず、管理事務所とシェルターが同じ住居の中にあります。建物はメゾネットになっていて、1階が事務所兼コミュニティスペースで、地域住民が自由に来てよいところになっています。2階がいわゆる生活困窮者や住居困難者の人たちが住むシェルターになっています。シェルターについては、どの国の研究でも同じようなことが言われていて、かなり管理が厳しいです。これは言い方が難しいのですが、滞在者に逸脱した行動をしてほしくないの、たとえば私物は絶対に持ち込まないでほしい、ペットなどもってのほか、というシェルターが多いです。ただ、生活困窮者や住居困難者の中には、やはりペットと離れたくない、絶対に一緒にいたい、という思いを持つ方もいます。ここでは、そうしたこと

を許容するだけでなく、ルールを設定していないことが非常に面白いところかと思います。一般に、シェルターでは飲酒・喫煙を禁止しているところが多いですが、ここはそれも認めています。

では、それで安全が守れるのかと思われるかもしれません。ルールを設定しないことで、入居者が酔って暴れたり、何かを盗んで持っていったり、あるいはそこに来た地域住民が何か好ましくないことをしたりする可能性も生まれてしまいます。しかし、それを空間的な工夫で対処している点はプロテストキャンプ的であり、より私たちの生活に近い工夫もそこにあると考えています。たとえば、シェルターにある棚には鍵がかかっていません。本当に普通の本棚があるだけで、つまり盗もうと思えば誰でも盗めてしまいます。だからといって鍵をかけるわけではなく、自由に持っていけるような空間をすることで、利用者の方は戸惑ってしまいます。自由に盗めれば逆に盗まない、という心の動きが生まれるのは、すごく面白い点だと思います。もちろん、実際に持って行ってしまう人もいるようですが。

シェルターにホワイトボードが置いてあるのも面白いところです。こうしたシェルターに来られる方の中には、他者の視線に恐怖を感じたり、人との対話をうまく進められない人も多くいます。そこでホワイトボードを置くことで、その人の状態に関することをここに書きながら、ミーティングができる上に、目線がホワイトボードに行くという効果も生まれます。一見すると普通のリビングですが、カウンセリングと日常会話の間のような、くつろぎに近いことができる空間上の工夫のようなものが随所になされています。これは、これまでに紹介したプロテストキャンプや、高山建築学校とも似ています。このリビングの端には、ペットのモルモットがいます。先ほど説明したように、一般的なシェルターではペットの飼育を禁止するところが多いのですが、ここではケアの対象をペットに担わせることで、誰もが世話をされるだけでなくすることができる、それによって有効感を得る工夫がなされているのかなど。シェルターの利用者は、たとえば病気や障害を抱えていたり、若い方も高齢の方もいらっしゃいます。どちらかといえば、周縁化された多様性があるというか、今の社会に生きづらさを感じている人も多く来られます。札幌のシェルターの事

例は、こうした人たちがどう共生していくかを、言葉ではなく空間を通じて、示したものではないかと思います。いわゆる SNS 上での社会運動が持つトゲのようなもののない空間というところが、非常に研究の事例として興味深いと感じているところです。

空き家を活用した兵庫県川西市の事例から

最後にご紹介したいのが、兵庫県川西市の事例です。札幌市の事例が一つの家の中のことであるとすれば、こちらは町ぐるみでそうした取り組みを行っているというものです。兵庫県川西市は、大阪、神戸のベッドタウンで、住宅地が広がっています。そして、中心駅の裏手に商店街があるのですが、既存の建物はかなり老朽化しています。こうした建物を安く借りて、シェルターや生活困窮者向けのシェアハウス、飲食店を活用した子ども食堂などを運営している団体が川西市にあります。広域にわたる支援を、都市空間を改造することで行う事例で、子ども食堂がもっともわかりやすい事例だと思いますが、困窮状態にあるような児童や家族の包摂を目的にしています。

ここでは、精神障害を抱えていたり、うつ病で一度離職したりした人も雇用されています。表現が難しいのですが、「双方からの支援」といえるようなことを行っているのが特徴です。子ども食堂は社会福祉協議会や福祉行政と連携しながら、就労体験施設としての性格も有しています。ですから、さまざまな事情でこれまで働けなかった、あるいは働くことから遠ざかっていた人たちが、試験的に働けるような場所を子ども食堂として提供しているといえます。

私もこちらの施設を何度か利用させていただきましたが、いい意味でサービスが徹底しすぎてないというか、ただ、そういう場所だからそれでいいのかな、と自然と思えてしまう空間でもあります。そうした面白さがここにはあるのだと思います。仮設性が高いというか、丈夫な建物でこうした取り組みを行っているわけではありません。こうした空間では多くのものを顧客、消費者として求めない、つまり人間が消費者にならない空間として非常に興味深く感じています。これは札幌の事例とも共通しますが、こうした空間だという前提を持ってそこに入れば、たとえば食器をレジカウンターに返すとか、あまり人

に視線を集中させないようにするとか、そうやって他者を配慮する主体になるんじゃないかと。こうした意味で非常に自治的な空間がここにはあり、誰もが空間の消費者にならずに済んでいます。

私はこうした研究に携わることで、いかに自分が空間の消費者であったか、空間に対して、自主的かつ自治的な主体でないことがわかったように思えます。講演のタイトルに「場」という言葉を使っていますが、場にはルールと役割があり、それを享受するだけではなくて、自分のその場の空気、雰囲気、多様性をつくる一つの能動的な主体だということが、研究から得られた大きな知見だったと思います。こうしたところで高級ホテルのようなサービスを期待しても仕方ないと思いながら私も行くので、お釣りを間違えられても、子ども食堂に来ていた子どもに蹴られても、あまり気になりません。お互いのミスや、「仕方のなさ」みたいなものを分け合える自治というのがここにはあるように感じます。空間のルールや雰囲気づくりにおいても、また実際に建築するという過程においても、DIY やセルフビルドは完璧ではないことをみんなが知っていますので、仕方ないかな、期待をしないでおこうかな、というタイプの自治があるように思います。

話が戻りますが、この飲食店は就労体験施設としての性格を有していて、近くには空き家を活用した従業員宿舎があります。町ぐるみで、労働から一時期離れていた人や、社会との関わりを持つことに怖さを感じるような人が、社会も悪くないかなともう一回思えるような働き方、過ごし方を、非常に低い期待値の上でできるようにしているのが、こうした場なのかなと思います。近い試みも全国各地にあります。もう一つ、川西市の事例は住居と店舗が近接したエリアなのですが、こうしたスペースだと保育園帰りの保護者さんが立ち寄りすることがあると。こうした中で聞き取った課題の中で、コミュニティで解決できないが制度が解決できそうな問題は、福祉につながることができます。これは制度化された政治とつながる可能性も示す、興味深い事例かと思います。

セルフビルド、DIY や社会運動の研究で、makeshift city（間に合わせの街）という言い方をすることがあります。私たちは丈夫な空間・建物、社会、教育システム、就職先が一番思いがちです。ただ、今日ご紹介した事例には、そ

こにはない面白さがあると考えています。このコミュニティを担う人たちにも、いつまで続くか分からないよねと言うような、一種の「適当さ」があります。この良さは、上手くいかなかったら変えられるし、今までになかった要素を持つ人が来たら、その人向けに空間をリメイクできます。ここに良い意味での仮設性があるように思えますし、彼らもハイコストで丈夫なものというより、ローコストで作り替えが可能なものをイメージしている。非常に柔軟性の高い自治をしているような気がしますし、この方が、多様な人たちに向けて社会をオーダーメイドできるのではないかとことを考えさせられました。

ミクロなレベルの社会運動

社会運動の研究者として思うことは、日本人は（世界でもそうかもしれませんが）社会運動をものすごくハードルの高いものだと思っているということです。たとえば、LGBTQ のパートナーシップや、選択式夫婦別姓など、非常に大事な社会運動のテーマがあり、多くの人はこうしたものを社会運動とイメージされると思います。しかしその運動参加率は非常に低く、たとえばデモの参加率は3.8%程度、ウェブを通じた社会運動も5%程度です。署名の経験率は高めでなんとか20%程度になるのですが、いずれにせよ運動参加率は低いと言われています。ただ、本当にそうなのかと私はずっと思ってきました。なぜこんなに日本社会が変わってきたのだらうと。たとえば、駅に行けばバリアフリー設備があり、男女雇用機会均等法や障害者に関連する法律もあるし、今日の学校では男女関係なく家庭科を学んでいます。日本は社会運動がマイナーな社会だと、私は十数年言い続けてきましたが、実は、社会運動は私たちの生活のいろいろなところにあるんですね。たとえば、車椅子の人が段差に困っていたら何人かで運んであげるということも、社会運動の芽を作りうるし、それを見た駅の係員が、バリアフリー設備があった方がいいのかと思ってスロープを作ったら、それは一つの社会の制度として形成されているわけです。こうしたミクロな善意や「お節介」のようなもの、互酬や助け合いには溢れている社会ではあるとも思います。そういう意味で、社会運動はもっとミクロなレベルのものをみてよいし、私たちだって社会運動をしていると言ってよ

いと思うのです。

私は国際社会入門という講義も担当していますが、国際、多様性というキーワードもハードルの高いものと学生に思われているところがあります。多言語を話せなければ、多様性に配慮した言葉遣いや作法を身につけなければ、と思われていますが、実はそれだけではないのではないかと。ハードルの高いものだけを、社会運動や多様性として見なしていくと、私たちが普段当たり前にしていることの、その達成が見えづらくなるのではないのでしょうか。私たちは、すでにグローバルとローカルを何らかの形でつないでいるし、多様性ある社会を実現しているし、それになんらかのかたちで貢献していると思っています。困っている外国人観光客の方に声をかけるという、それだけでもよいわけです。

私が調査したある国のアクティビストの人が言っていたことが、非常に面白いものでした。社会運動というのは、民主主義とかフェミニズムとか環境正義とか、そういうバズワードではないんだと。ここにある段差をパテで埋めたら、車椅子の人や子どもが歩きやすくなるだろう、それがすでにダイバーシティじゃないかと言われて、私もそうかなと思いました。この人は非常に面白い人で、いつも街路のヒビを埋めているんです。自分がやったとも言わないし、デモに参加するわけでもないのですが。しかしそれで確かに歩きやすくなった人がいて、もしかすると行政がそれを見て、清掃の人員を増やそうと思ってくれるかもしれません（逆もあるかもしれませんが）。これがアクティビズムであるし、多様な人々が生きる社会を作ることではないかと思いつつ、研究と生活をしているというところですよ。

非常にミクロな話題が続き恐縮ですが、多文化共生、多様性、包摂というのは、非常に重要なフレーズですし、私たちも意識していかなければならないことだと思います。かつ、社会運動や政治活動というの、やはり私の観点からすると進めていきたいというか、人が声を上げられない社会より上げられる社会の方が何倍もよいと思っています。しかし一方で、こう言ってしまうと難しく感じられるものでもあって、それを大それたことにしないというのも同じくらいに大事だと思います。私たちの政治は、もちろん政策提言によっても、

陳情によっても、デモによっても始まります。しかし、実はそれ以前に始まっているものがあります。椅子を背の低い人にも見えやすいように動かす、あるいは、ぐらついていたら、心身に不調がある人でも安心して座れるように直す、こうしたことがすでに政治であるということが、私が国際的な研究対象から学んできたことです。それを教えてくれたインフォーマントの方の言葉を、最後に紹介させていただきました。ありがとうございました。(拍手)



シンポジウム 基調講演